

福岡県矢部村方言における文表現

(卒論 福岡県八女郡矢部村の方言研究)

三十一回生 栗原恵美

結 び

卒論「福岡県八女郡矢部村の方言研究」では、現地調査に基づいて、矢部村方言の音韻と文法について述べてみた。

卒論目次

序論

本論

第一章 音韻

第一節 音韻体系

第二節 特殊な音韻転化の現象

第三節 長母音・連母音・長子音

第二章 文法

第一節 文表現

1. 文末部

2. 述部

3. 修飾部

第二節 語形態

ここでは「福岡県矢部村方言における文表現」と題して、卒論の第二章第一節を取り上げて紹介したい。

本論に入る前に、矢部村について簡単に紹介すると、位置としては福岡県の南東部で、太分県、熊本県と境をなしている。人口二千七百人余りの山間の僻地である。村の人々は農業や林業を営むことによって生計をたてている。

さて、当村方言の文表現を分析して得た諸要素のうち、主要素とも言うべき「文末部」「述部」「修飾部」を取り上げ、各々の表現機能の究明を進めていくこととする。

1. 文末部

文末部は、文表現を最終的に統轄し、かつ聞き手への、何らかの呼びかけの機能をみせるのが一般である。いわば、文表現の特質はこの文末に最終的に表示されるとも言える。

①
/

○キヨ一ワ ヌツカノ一。(今日は暖かいねえ。)

② ナイ・ナイヤ

○キョーワ ヌツカ ナイ（ナイヤ）。（今日は暖かいねえ。）

③ クサ・クサイ・クサン

○ヨカクサ。(いいとも。)

○センデン
ヨカ
クサイ。
(しなくてもいいさ。)

なお、まれに

○ヨカ
クサン。
(いいとも。)

サイ」同様、末尾の鼻音に強調を柔らげる特殊な効果が認められる。

④ タイ・ダイ

○イカンデチャ ヨカ タイ。(行かなくてもいいよ。)

この「タイ」は「ター」「タン」と転訛しても用いられる。

○ケシキン ヨカッタロー ダイ。(景色が良かったで
しょう。)

⑤
コ
テ

○ハヨ イカナ コテ。(早く行かなくては。)

⑥
バイ

○ドゲン ション ナカバイ。(どうしようもないよ。)

このように「バイ」は話し手個人の判断を一方的に表出し、訴えかけていく機能がある。いわば、話し手中心の、一方的な自己表出を基本とするものである。

⑦
ゲ
ナ

○ドッカイカステ。(シニール)丁>し>ニール。イ

このように「ゲナ」は、伝聞の意を表出する。

2. 述部

述部は、文の叙述の基幹をなす部分である。

(1) 敬語法

① 〴ナサル

○オイシヤサンノ キナサッタ。(お医者さんがいらした。)

「ナサル」は、動詞の連用形に接して、高い尊敬の意を表す。動詞「為す」の未然形＋助動詞「る」が四段化したもの。

② 〵ナハル

○オキヤクサンノ キナハッタ。(お客さんがいらした。)

この「ナハル」は前述の「ナサル」が変形したものである。

③ 〵ス(サス・ラス)

○オッチャンノ イワシタ。(おじさんが言われた。)

○コノマエ ケツコン サシタ。(この前結婚された。)

○オキヤクサンノ オキラシタ。(お客さんが起きられた。)

この「ス」はいわゆる五段活用動詞の未然形に接する。活用形もほぼ整っているが、命令形はない。

また「サス」は、「結婚サス」、「説明サス」、「流サス」、「泣かサス」などのように「〵する」や「〵す」という動詞に接続する。

なお、例文中に「オキラシタ」のような「〵ラス」が観

察される。これは、ラ行五段化の過程にある動詞の第一形(いわゆる未然形)「〵ラ」(この場合は「オキラ」)に先述の「ス」が接してなったものである。「見ラス」「クレラス」など同類である。

一方、

○ナーンモ セラッサン。(何もされない。)

の「セラッサン」の場合は、サ変動詞「する」の未然形「せ」に「ラス」が接続したものとみなす。カ変動詞「来る」においても同様で「来ラス」＝「来」＋「ラス」と判断する。以上の語法は概して敬意度が低い。しかも、だいたい聞き手に対してではなく、話題中の第三者に関して用いるのが普通である。聞き手に関して用いれば、敬意の低さからくる侮蔑的な色調を伴いがちで、礼を失することにもなる。その第三者に関して、

○オカサンノ カエッテコラシタ。(お母さんは帰って来られた。)

などのように、話し手の家族、または、これに類する人々に関して用いることもある。

また、「〵ス(ラス)」の連用形で完了を表す「〵シタ(ラシタ)」は、イ音便で次のようになる場合がある。

○コノマエ イカイタ バイ。(この前、行かれたよ。)

このときは「イカシタ」よりも、さらに敬度が下がる。

以上、矢部村方言における敬語法を述べたが、その状況が単純であることが認められる。当村のように、社会関係や人間関係が内輪で、互によく知り合い、親しみ合い、

家族的であれば、高い敬意などを表現する必要がなく、そんなことをすれば、却って不自然な感じがするのである。しかし、最近では、交通・通信・文化の発展によって、他地域との交流が深まり、また、人々の村外流出が多くなるにつれて、敬語のあり方を考え、また、教育することが必要となってきた。

(2) 様態叙法

矢部村方言にあっては、動作の進行態と状態の継続態とが叙法を異にする。いずれも「おる」が機能することによって成立するが、その「おる」が前者（動作進行態）は用言に直接し、後者（状態継続態）は用言に「て」を介して接する点に、相違が認められる。

① 動作進行態

動作進行態は次のように「^レヨル」で表わされる。

○アメン フリヨル ヨー。（雨が降っているよー。）

なお、次の例は形容詞に接して過去の進行態を表す、特殊な例である。

○ムカシヤ マーダ アツカリヨッタ。（昔はまだ暑かった。）

② 状態継続態

状態継続態は次のように「^レトル」で表される。

○チット クモットル ナイ。（少し曇っているねえ。）

(2) 可能態叙法

可能の表現にあって、「能力可能」と「状況可能」とが叙法を異にしている注目される。

① 能力可能法

「能力可能」とは、一定の動作が、主としてその動作主体の能力に基づいて、成就実現する場合を、特にこのように言って区別したものである。その能力可能は普通「^キル」によって表される。

○カトシテモ タベキル。（固くても食べられる。）

右の例文の「タベキル」は、動作主体に、食べる能力が備わっていて、当該の動作が、成就実現することを表している。

不可能を表す場合は、また、「モチキラン」（持てない）、「シワキラン」（できない）などのように「^レは」を用いて限定・強調の表現をしたてることがある。

② 状況可能

「状況可能」とは、一定の動作が、その動作主体の立つ、客観的状況に支えられて成就実現する場合を、特に、このように言って、区別したものである。

「状況可能」には、「^レル（ラルル）」が立つ。

○ヨーナッタケン モー オキラルル。（よくなったから、もう起きられる。）

○クルマバ モットルナラ ドコサンデンイカルッタイ。（車を持っているなら、どこへでも行かれるね。）

いずれも動作の成就（不成就）が、客観的な状況に基づくとしての可能表現である。

(3) 否定法

主として「否定形」で立つ動詞のかかわる特定の習慣的

叙法を異にしている注目される。

(3) 否定法

主として「否定形」で立つ動詞のかかわる特定の習慣的

な表現に注目してみる。

① ノサン

○ コゲン アツカト ノサン。(こんなに暑いとたまらない。)

この「ノサン」は「堪えられない」の意味で慣用されている。この意味の系列に属する「否定形」以外の活用形は認められない。

② ナラン

○ ワリコツァ シチャ ナラン。(悪いことはしてはいけない。)

この「(ゝ)は」ナラン」は、禁止の言い方である。

③ イカン

○ ハヨ カエラント イカン。(早く帰らないといけない。)

この「(ゝセント)イカン」は、意志・判断の表明である。

④ ーダサン

○ コズカイモ モライダサン。(小遣いももらうことができない。)

外的な状況に制約されての不可能を表す言い方である。

④ 希望・願望法

① タカ

○ ウミニ イキタカ。(海に行きたい。)

願望を表す「タカ」は「タイ」が変化したものと思われる。

② ゴタル

○ カンゴフサンニ ナローゴタル。(看護婦さんになりたい。)

「ゴタル」は比況の助動詞「ゴトシ」の語幹「ゴト」＋補助動詞「アル」の「ゴトアル」から出来たものであると思われる。矢部村方言においては、この「ゴトアル」の形はみられない。

なお、この希望・願望の用法の「ゴタル」は、動詞の意志形に接続する。また、比況(ゝのようだ)の意を表す「ゴタル」は活用語の終止形、及び意志形、「体言十の」に下接する。

(5) 勧誘法

○ ヤマサン ハヨ イコイ。(山に早く行きましょう。)

このように動詞の意志形に「イ」を下接させることによって、勧誘の意を表出する。

(6) 体言化法

述部を体言化する特殊な表現法は、特に「体言化法」として把握される。

○ マーダ ヨーイ シトラン トコレー。(まだ用意していないのに。)

この末尾に位置する「トコレ」は、体言にかかわるものである。これには期待に反する心意を表す内容が認められる。

(7) 特殊句法

動詞の用い方に、特殊とされるものがある。

① 来る

○コンバン クッケンノー。(今晩行くからねえ。)

このように「来る」が、自己の動作の「行く」の意でも用いられて、特色を示している。この「来る」は、目的的に重点をおいての特殊句法である。

②ある

○ドー アロー。(どうだろう↓どうでもよい。)

○ドー アッカイ。(どうだね。)

ここにも「ある」の特殊句法がみられる。さらに「ある」は、

○ナンジ アッカイ。(何時かい。)

○イチジ アルヨ。(一時だよ。)

のように時間表示に関しても用いられる。

3. 修飾部

ここでは、主として述部にかかる修飾部をとりあげる。それも、いわゆる連用修飾部に注目していきたい。そして、ここでは主として、助詞のおこなわれる修飾部をとりあげ、その特質を記述していくことにする。

(1)格表現

格助詞によってしめくられる修飾部のおもなものをとりあげる。

①ノ

はじめに、「ノ」の主格表示の用法である。

○ソUNCHョーサンノ キナサル。(村長さんがいらっしゃる。)

②ガ

「ガ」による主格表現は、次のようにおこなわれる。

○オドンガ イコー。(私が行こう。)

○ダッガ シタツカ。(誰がしたのか。)

このように、自称、および不定称の代名詞は、だいたい「ガ」をとりやすい。

○ムカシントガ ヨカ。(昔のがいい。)

右のように、比較法に立つ表現の場合など、いわば、主格の強調の場合には「ガ」がおこなわれやすい。

○コリガ クロカ。(これが黒い。)

このように、指示代名詞の格は、「ガ」によって表示されやすい傾向がある。

「が」による主格表現は、「ノ」によるそれに比して、用法が限られており、使用頻度も比較的低い。

③サン

方向は、普通「サン」によって表示される。

○ガッコサン イコイ。(学校に行こう。)

④バ

対象は、「バ」によって表示されるのが、普通である。

○コッバ クダサイ。(これをください。)

(2)接続表現

接続助詞によってしめくられる修飾部の主なものをとりあげる。

①ケー・ケン

○ヒノ クルッケー ハヨ モドロイ。(日が暮れるから早く帰ろう。)

「ケー・ケン」は順接の既定条件を表す。

② バッテン・バツテ

○ ハジメ カッタバツテン アトカラ マケタ。(初めは勝ったけど、あとから敗けた。)

「バツテン」は逆接の既定条件を表す。これは縮約化されて、「バツテ」ともなる。

前項の「ケン」と「バツテン」は、「ガ」を伴って、「ケンガ」、「バツテンガ」としておこなわれることもある。この「ガ」は接続、修飾の構えに応じて添加されていたとみられる。

③ トコレ

○ イッタトコレ ダーレン オランモン。(行ったのに誰もいないもの。)

「トコレ」は逆接の既定条件を表す。

(3) 限定表現

① ーシコ

○ コガシコ シトケ。(これだけしておけ。)

一定の範囲、または限定を表す。

② ーバシ

○ アンヒトデバシ ナカラニヤ ワカランメー。(あの人ででもないとかかるまい。)

このように、提示の機能を見せている。

○ ベンキョーバシ スゴツ。(勉強もしないのに。)

この例文に見られる「ーバシーゴツ(ト)」は、一文中に慣用されて、一種の反語表現を生んでいる。

③ ーバツカシ

○ ムカシンコツバツカシ ハナサス。(昔のことばかり話される。)

「ーばかり」の変化した形であろう。

④ ーテロン

○ カキテロン ミカンテロン アバカン モロタ。(柿とかみかんとか、たくさんもらった。)

並列の機能になうものである。

⑤ ーガタ・ガツ

○ ヒャクエンガタ(ガツ) クダサイ。(百円分ください。)

⑥

限定表現にかかわる助詞は、以上の外に、なお次のようなものがある。

デン(でも)・ドン(ども)・ナット(なりと)・マデ(まで)・ダケ(だけ)・ズツ(ずつ)・ナガラ(ながら)

以上、矢部村方言における文表現について述べてみたが、紙面の都合で、矢部村方言の音韻や語形態は省いている。より詳しいものを求められる方は、卒論を参照されたい。